

自由研究発表

住むところとしての「海」

—南東スラウェシ・バジョ集落の居住空間の生成に関する考察—

The sea is an inhabitant place:

An analysis about Kampung Bajo forming in Southeast-Sulawesi.

加藤 久美子（上智大学アジア文化研究所）

Kumiko Kato

(The Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies (IAAMES),

At Sophia University)

海民バジョは、東南アジア島嶼部海域に広く分布し、鉄木（Kayu Besi）の柱を使った杭上家屋を海上に建設、集落を形成することでも知られる海洋交易民の一派である。近年は木材の枯渇や陸への移住が見られ、鉄木を利用した杭上家屋を見ることも少ない。しかし、南東スラウェシ州では、埋め立てや陸移住と並行して、現在も海上集落が複数形成されており、様々な建築材を応用する技術も見られる。また、埋め立てた「土地」の所有をめぐることは、自治体により測量が行われ「所有証明書」が発行されるなど、バジョ集落の形成に合わせた自治体の対応も見られる。

そもそも、海は誰のものなのか。所有できる空間とは、如何なるものなのか。本研究が対象とするスラウェシ島周辺は、古くから漁撈・交易活動が盛んに行われる空間であり、17世紀には、海の共有と独占をめぐる、大戦争が引き起こされた地域である。マカッサルを中心に交易で栄えたゴワ王国の王は、「海は万人のもの」として、港の独占を要求する東インド会社と対立したのである（早瀬 2003：24）。

スラウェシをはじめとした東南アジア島嶼部の海洋空間に纏わるコモنز（共有）という認識は、資源管理の慣行であるインドネシアの東部の「サシ」やなわばり、国家の「領海管理」と現地民の衝突や交渉といった側面からも検討されてきた（村井1998; Stacey 2007等）。本報告では、居住という側面から、ひとびとの海洋空間の利用と認識を考察したい。そしてスラウェシ周辺の海洋民が認識する自然環境・海洋空間にかかる所有観念と関わり的一端を明らかにすることを試みる。

参考文献：早瀬晋三 2004年『海域イスラーム社会の歴史：ミンダナオ・エスノヒストリー』岩波オンデマンドブックス/村井良敬 1998年『サシとアジアと海世界—環境を守る知恵とシステム』/ Stacey, Natasha. 2007. *Boats to Burn: Bajo Fishing Activity in the Australian Fishing Zone*. Sydney: ANU E Press.